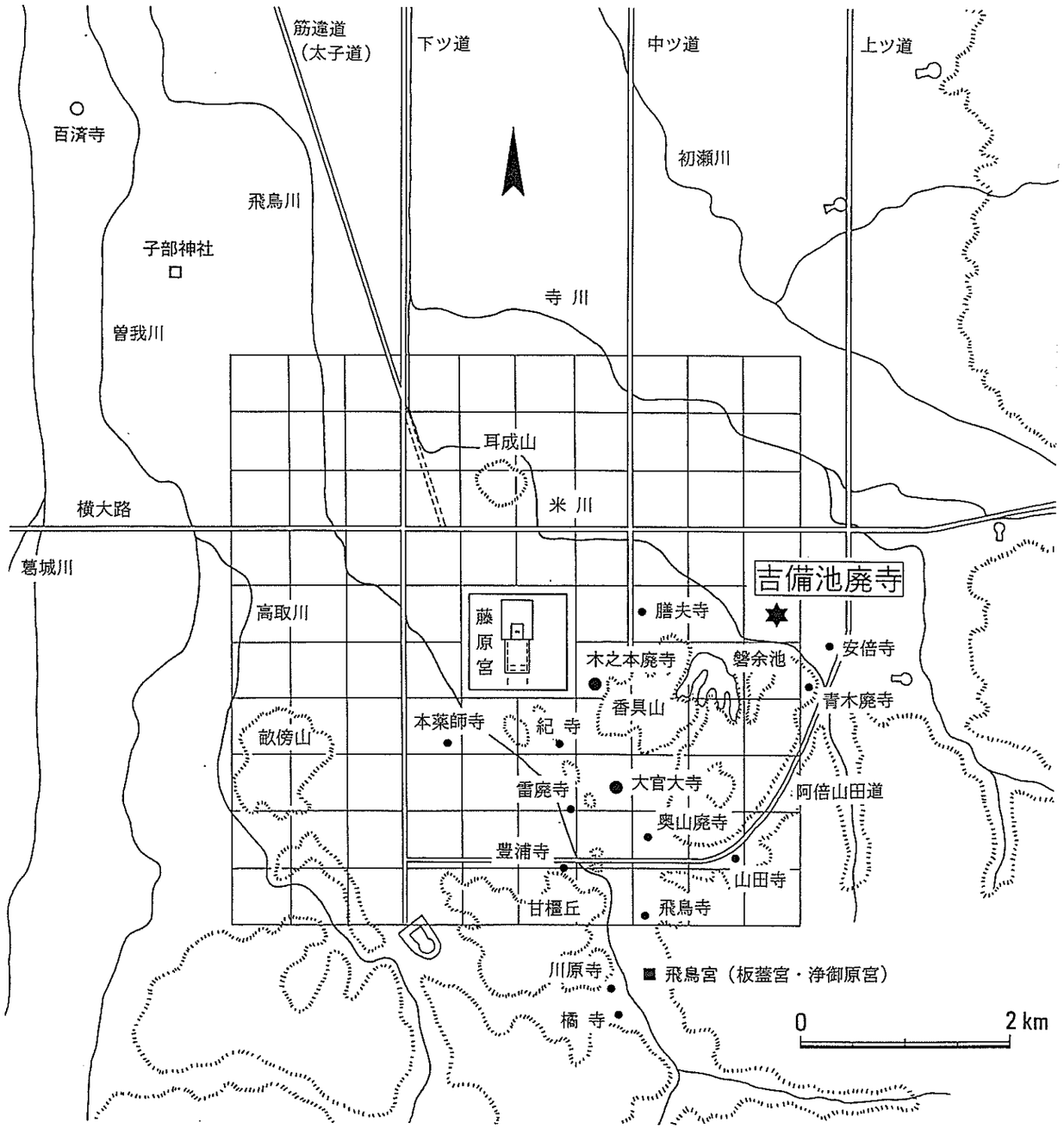
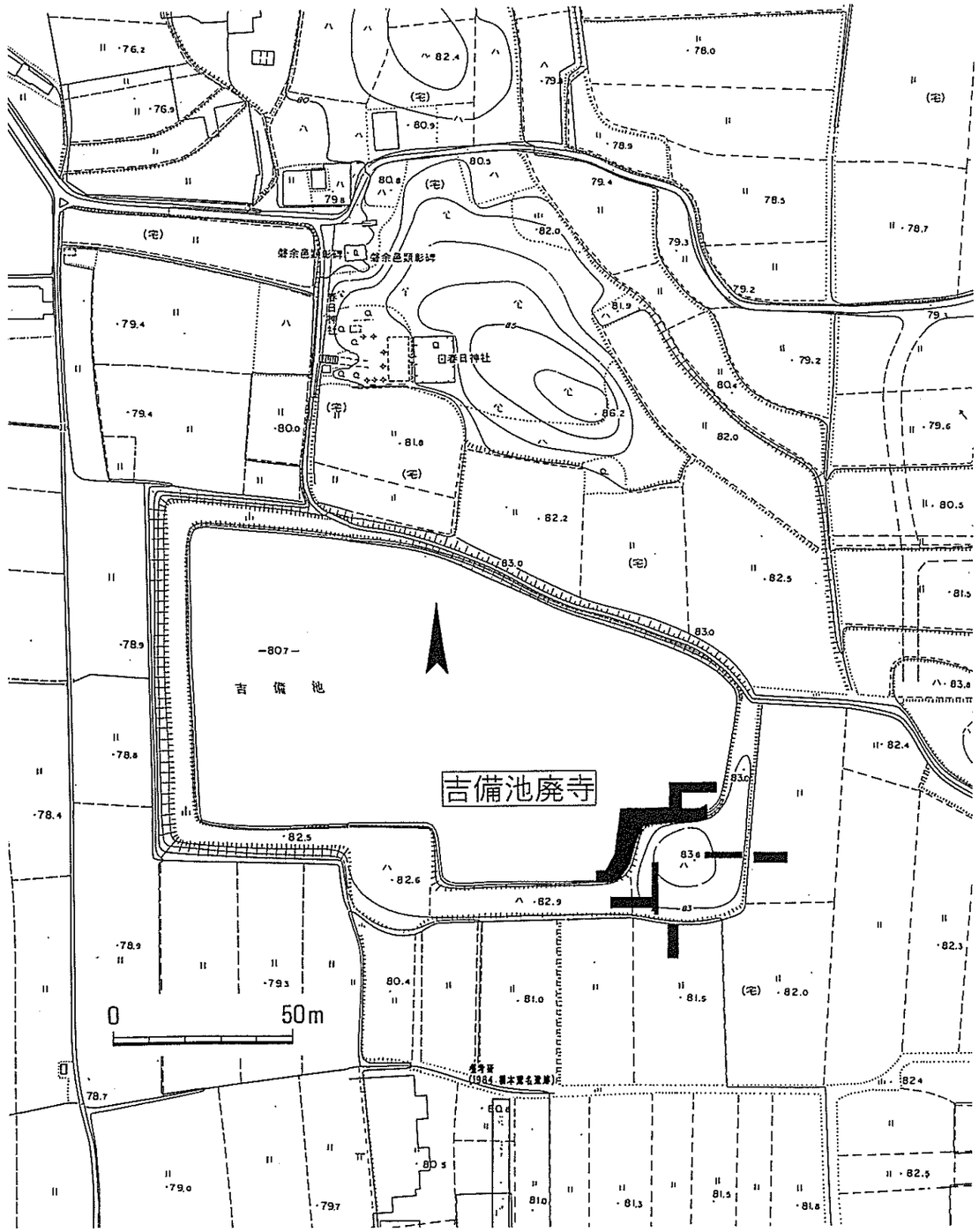
吉備池廃寺

現地説明会資料

奈良国立文化財研究所　飛鳥藤原宮跡発掘調査部
桜井市教育委員会

1997年　3月1日（土）





瓦窯ではなかった！

吉備池（きびいけ）は、桜井市吉備にある農業用の溜池です。この池の岸から、飛鳥時代の瓦が見つかることは、以前から知られていました。

これを、寺院（吉備寺）の跡とする説もありましたが、瓦の集中する範囲がごく狭いこと、同じ木型（きがた）でつくった瓦が橿原市木之本町の木之本廃寺（きのもとはいじ）でみつかっていることなどから、近年は、木之本廃寺の瓦を焼いた瓦窯（かわらがま）と見る説が有力となっていました。

そういう状況の中で、今回、奈良国立文化財研究所と桜井市の共同調査として、１月９日から発掘にはいったわけです。調査面積は約380㎡です。

ところが、そこで見つかったのは、瓦窯ではなく、寺院の基壇（きだん）でした。それも、並みの大きさではない、特大の基壇だったのです。

実は、発掘調査に入る前におこなった地中レーダー探査でも、窯ではなく基壇らしいという成果は得られていました。こうしたハイテク探査の威力をあらためて認識させる結果となったわけです。

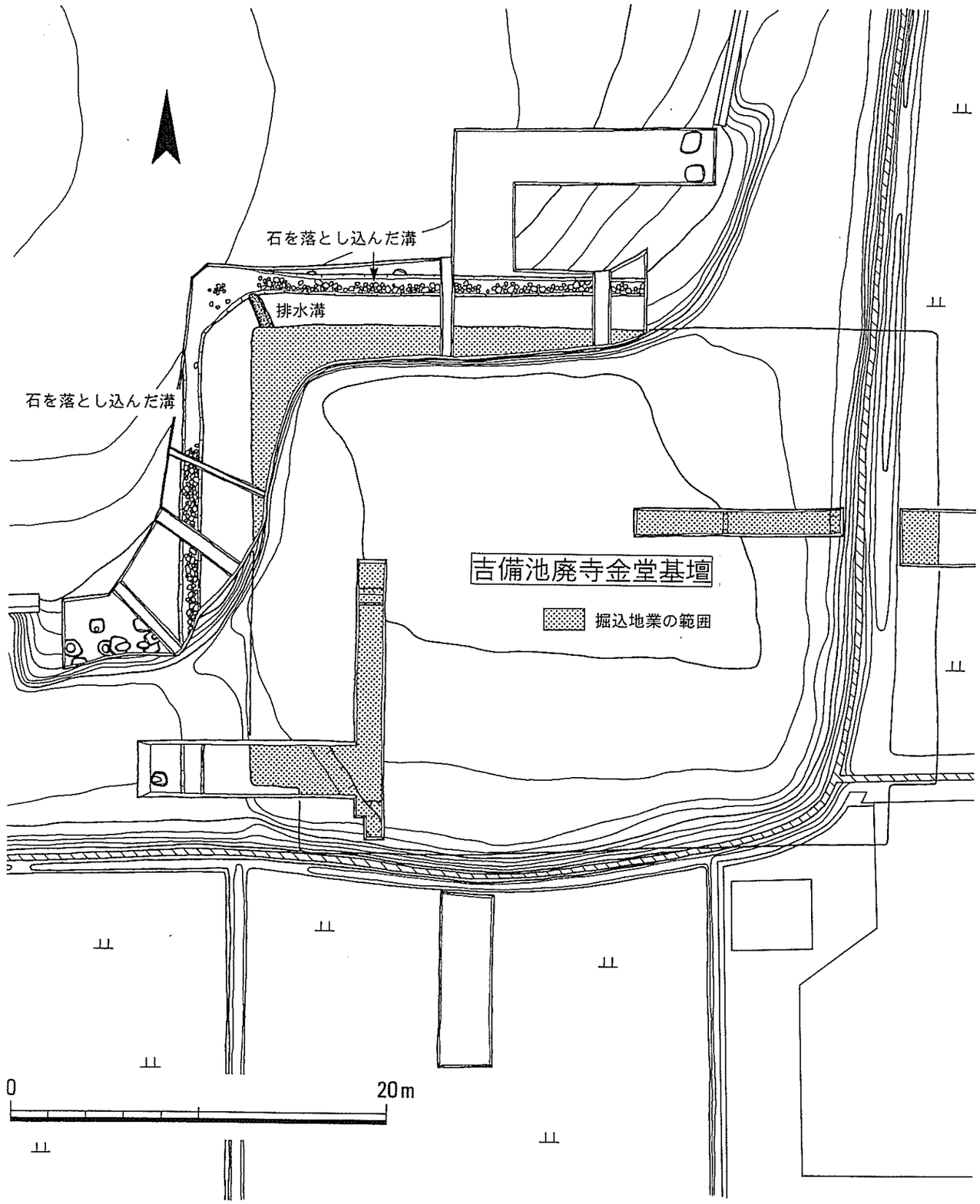
掘込地業の確認

今回明らかになったのは、建物の土台である基壇の大きさです。とはいっても、基壇のまわりにあったはずの石材（基壇化粧）は全く残っていません。基壇じたいも、のちに削られて小さくなっています。

基壇の大きさを知る手がかりになったのは、掘込地業（ほりこみじぎょう）という工法です。これは、地面を基壇とほぼ同じ大きさに四角く掘り下げて、その底から基壇土を積み上げるという、ひじょうに丁寧な基礎工法です。飛鳥時代の建築によくみられますが、時代が降ると、地面の上に直接土を積む簡略な方法にかわります。

吉備池廃寺では、掘込地業の底に、拳（こぶし）から頭の大きさぐらいの石を置いているようです。そして、その上に、土を薄く層になるように突き固めながら積んでいます。版築（はんちく）とよぶ、中国に起源をもつ工法です。だいたい、もとの厚さの６割ぐらいになるまで突き固めます。

なお、基壇土を積むさいには、掘込地業の中に溜まる水の処理が問題となりますが、吉備池廃寺の場合は、一番地形的に低い西北の角に、こうした水を外に流すための排水溝をもうけていました。



飛鳥時代最大の金堂

吉備池廃寺では、掘込地業の西北の角を含む北辺と西辺、それと反対側の東辺を確認しました。また、問題が残りますが、西南の角とみられる部分も見つけています。

これによって、掘込地業の範囲は、東西36.2m、南北24.6mほどと確定することができます。ただし、南辺にはさらに張り出しがみられます。いちおう、階段部分を含めた掘込地業と考えていますが、それを含めて基壇の大きさとみると、南北はさらに長く、27m程度になりそうです。

一部、基壇の断ち割り調査をおこなった結果によれば、掘込地業の外にも基壇の版築層がつづいているので、基壇の大きさがこれを下回ることはないと考えられます。

基壇の高さも、現状で、もとの地表面から２m近くあり、掘込地業の底からでは 2.5mに達します。寺の中でも、もっとも重要な建物のひとつであることは間違いありません。基壇の形が横に長いことから、塔とは考えられないので、のちの本堂にあたる金堂（こんどう）とみるべきでしょう。

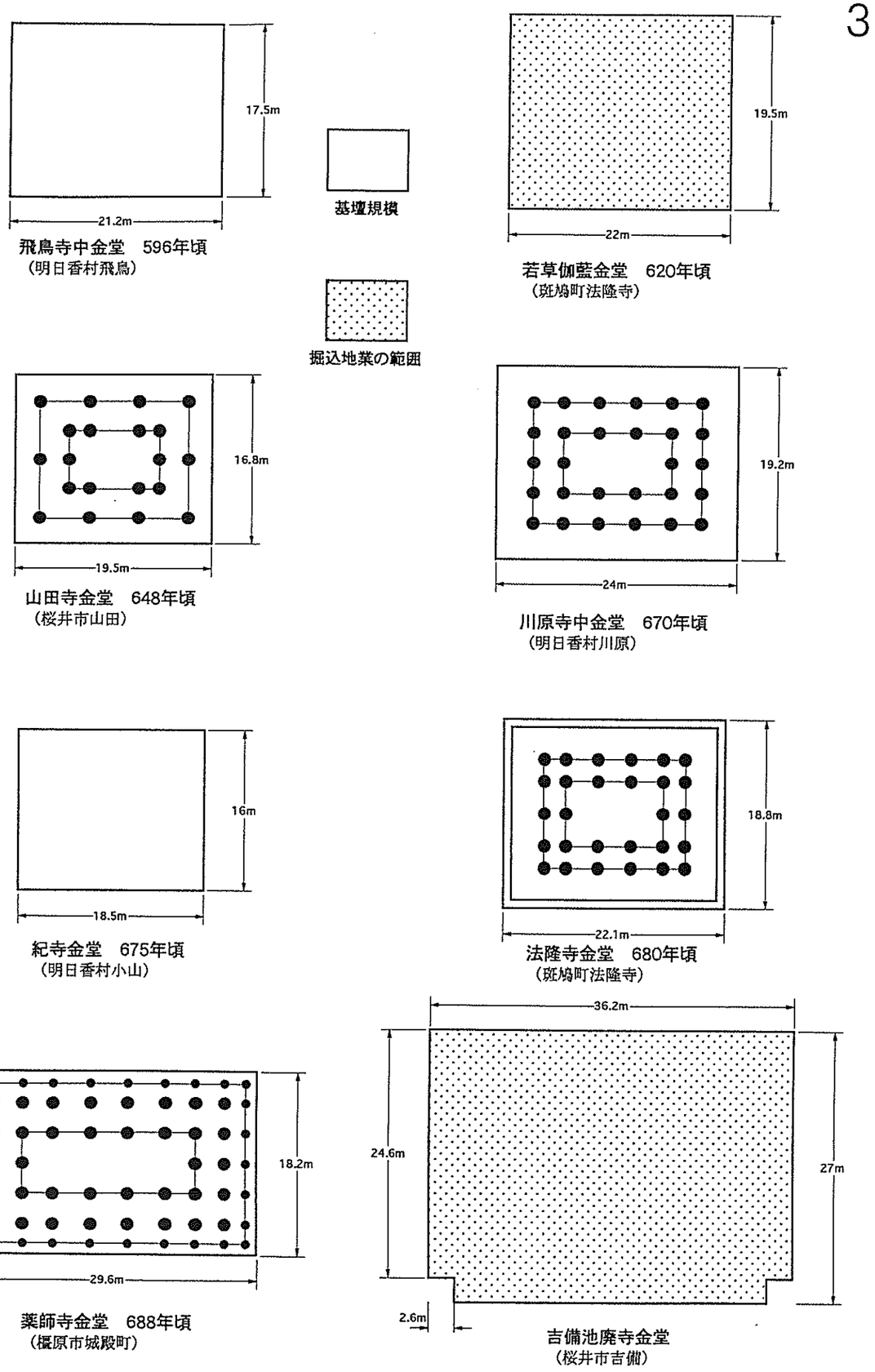
そうすると、今回判明した金堂基壇は、飛鳥時代（諸説ありますが、ここでは、推古天皇が豊浦宮で即位した５９２年から、持統天皇が藤原宮へ移る６９４年までを飛鳥時代とします）最大の規模ということができます。これまでに見つかっているものにくらべると並外れて大きく、小型の金堂なら三つか四つがすっぽりと入る大きさなのです。

基壇化粧は？

基壇のまわりは、もとは石材を用いて美しく整えていたはずです。これを基壇化粧（きだんけしょう）とか基壇外装と呼んでいます。

しかしながら、今回そういった施設は全く見られませんでした。おそらくどこかへ運び去られたものと思われます。

ただ、基壇の北と西には、河原石を落とし込んだ深い溝がめぐっています。江戸時代の土器が入っていますので、耕作の支障となる石を捨てるために掘ったのでしょう。この石は、本来、金堂の基壇に使用されていたとみるのが自然です。大きさと形、数量からすると、基壇まわりの雨落（あまおち）や石敷き、礎石の根石（ねいし）といった可能性が考えられそうです。



瓦の年代は640年頃

では、吉備池廃寺の年代は、具体的にいつ頃なのでしょうか。残念ながら今回の調査で土器はほとんど出ていませんので、これについては、やはり瓦が重要な鍵となります。

吉備池廃寺から見つかる軒瓦は、ひじょうに大型で、しかも二つの組合せしかありません。軒丸瓦（のきまるがわら）の文様（もんよう）は、蓮の花をかたどっていますが、いずれも山田寺（桜井市山田）のものによく似ています。ただし、それよりもわずかに古い特徴をそなえています。

山田寺の建物のうち、もっとも早く建てられたのは金堂ですが、その建設は、６４３年にはじまっています。ですから、吉備池廃寺の瓦は、その直前の時期と考えることができます。

なお、吉備池廃寺の軒丸瓦の木型は、その後、四天王寺（大阪市）の瓦づくりに使われ、さらに海会寺（かいえじ、大阪府泉南市）に運ばれました。

一方、軒平瓦（のきひらがわら）は、忍冬文（にんどうもん）と呼ぶ植物図案ですが、小さい木のスタンプで押しています。このスタンプは、若草伽藍（わかくさがらん、斑鳩町法隆寺）で使ったものの再利用です。

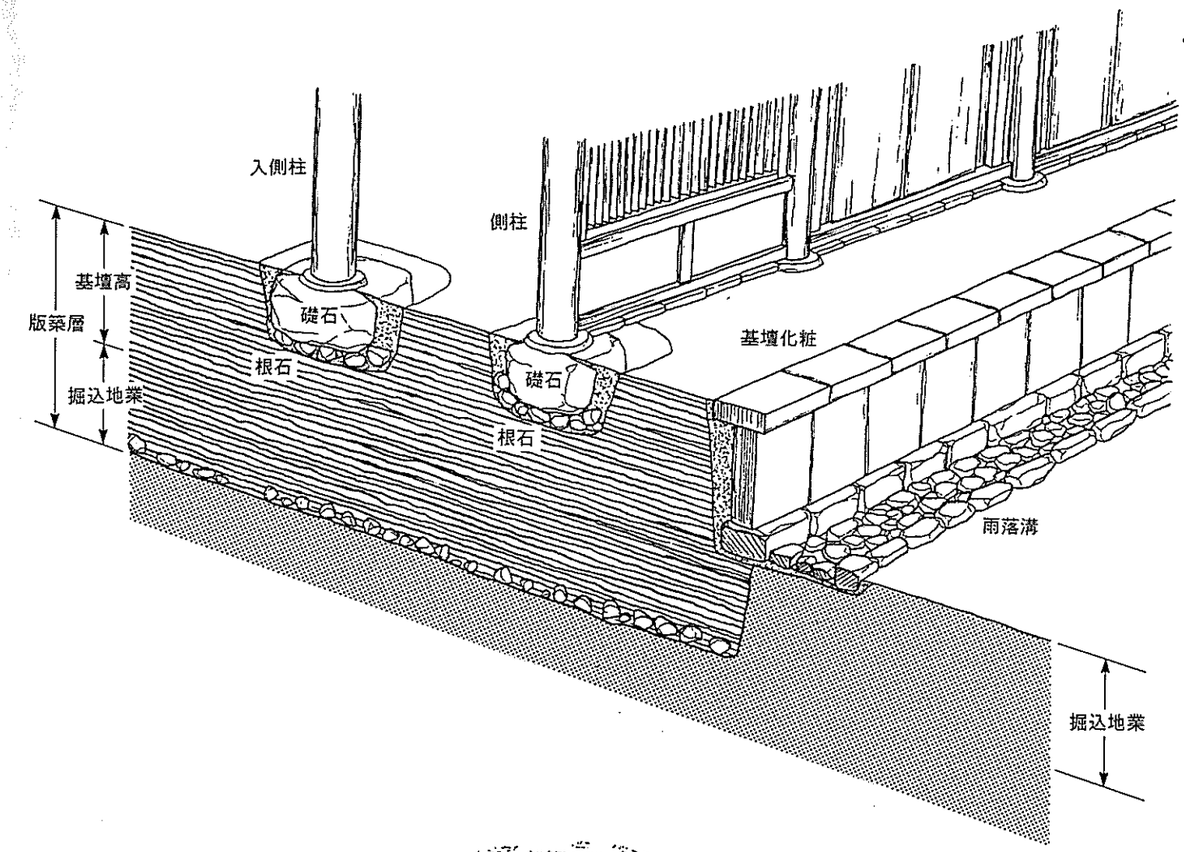
若草伽藍の完成は、６４３年以前です。ここのスタンプが吉備池廃寺用となった年代は確定できませんが、軒丸瓦と同じとみて矛盾はありません。山田寺では、軒平瓦が重弧文（じゅうこもん）という新式の文様に変化しますので、やはりその前の段階のものであることは間違いないでしょう。

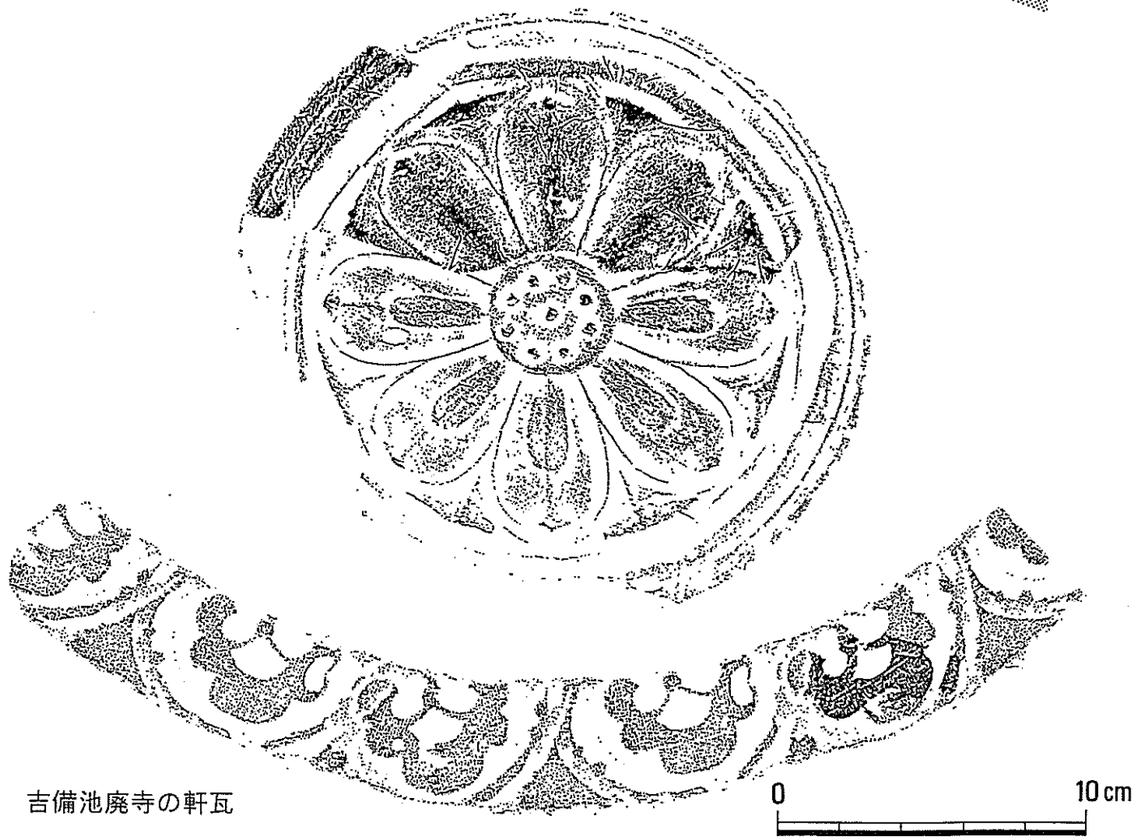
瓦の量が少ない…移建されたか？

今回見つかった軒丸瓦は８点、軒平瓦は４点にすぎません。また、ふつうの丸瓦と平瓦は、あわせて160箱ほど出ていますが、これも、寺院の発掘にしては少ないといえます。とくに、丸瓦や平瓦は、軒瓦にあわせてかなり大型の製品ですが、もとの形を保ったものはまったく見あたりません。

どうやら、この寺は、この場所で命脈を絶ったのではなさそうです。補修用の軒瓦がまったくないこととあわせて、比較的短期間のうちに、ほかの場所に移建された可能性が高いと思われます。

吉備池廃寺で出土するのは、その際に残していった、破損して使いものにならない瓦ではないでしょうか。





吉備池廃寺の軒瓦

百済大寺か？

今回の吉備池廃寺の発掘によってわかったことを整理してみましょう。

① 飛鳥時代最大の金堂基壇であることが明らかとなった。

② 瓦からみて、その年代は６４０年ごろである。

③ 比較的短い間しか続かなかった。焼けた痕跡は認められない。

④ どこか別の場所に移建された可能性が高い。

吉備池廃寺は、歴史上のどの寺にあたるのでしょうか。まず、その規模からみて、とても一豪族の私寺とは思えません。吉備氏の氏寺（吉備寺）と考えるのは、この点でも無理でしょう。やはり天皇あるいは朝廷によって建てられた寺とみるべきだと思います。

すると有力な候補として浮上してくるのが、幻の大寺といわれる**百済大寺（くだらのおおでら）**です。６３９年に、舒明天皇によって建てはじめられた寺院で、天皇が建てた寺としては、最初の例になります。

また、瓦の年代がぴったり合うことも強みです。従来から、吉備池廃寺の軒瓦は、百済大寺のものとする説が出されていました。これまでは、寺院としての証拠を欠いていたのですが、それが確認された以上、吉備池廃寺を百済大寺とみる説は、考古学的にかなりの説得力をもつものといえます。

さらに、百済大寺は６７３年に移建されて、高市大寺（たけちのおおでら）となります。吉備池廃寺が短期間で他へ移転している点とも合致します。

なお、高市大寺の場所も確定していませんが、吉備池廃寺とまったく同じ組合せの軒瓦が出土する木之本廃寺は、その有力な候補となりましょう。逆に、十市郡（とおちぐん）の吉備池廃寺を高市大寺にあてるのは困難です。

今後に向けて

しかし、吉備池廃寺＝百済大寺説には、なお多くの問題があります。百済という地名が周辺にないこと、百済大寺の近くにあったとされる子部社（こべのやしろ）が、少なくとも現在は見あたらないことなどです。

吉備池廃寺一帯は、のちに「藤原京」条坊の範囲に入り、その後、さらに条里がしかれます。ここでは、そうした中で、百済大寺の正確な所在が忘れさられていった可能性を想定し、あとは今後の検討項目としておきます。

また、金堂の柱配置や、西に残る土壇を含めた伽藍全体の解明、一部見つかっている掘立柱建物の性格の究明も、これからの課題です。

百済大寺と高市大寺の歴史

６３９（舒明11年）	大宮と大寺をつくる。百済川のほとりを宮地とし、西の民は宮を造り、東の民は寺を作る。百済川のほとりに九重塔を建てる。	日本書紀	百済大寺
	百済川のほとりに子部社（こべのやしろ）を切りひらいて、九重塔を建てる。百済大寺（くだらのおおでら）と号す。	大安寺伽藍縁起并流記資財帳（以下、大安寺縁起）	
６４０（舒明12年）	百済宮（くだらのみや）に移る。	日本書紀	
６４１（舒明13年）	舒明、百済宮で死去。宮の北で殯(もがり)をする。	日本書紀	
６４２（皇極元年）	百済大寺を建てるために、近江と越（こし）の人夫を動員する。飛鳥板蓋宮をつくりはじめる。	日本書紀	
６４３（皇極２年）	飛鳥板蓋宮（あすかいたぶきのみや）に移る。	日本書紀	
６７２（天武元年）	飛鳥浄御原宮（あすかきよみはらのみや）に移る。	日本書紀	
６７３（天武２年）	造高市大寺司（たけちのおおでらつくるつかさ）を任命する。	日本書紀	高市大寺・天武朝大官大寺
	百済の地から高市の地に寺を移す。	大安寺縁起	
６７７（天武６年）	高市大寺（たけちのおおでら）をあらためて、大官大寺（だいかんだいじ）とする。	大安寺縁起	
６８２（天武11年）	大官大寺で140人あまりを出家させる。	日本書紀	
６８５（天武14年）	大官大寺・川原寺・飛鳥寺で経をよませる。	日本書紀	
６９４（持統８年）	藤原宮（ふじわらのみや）に移る。	日本書紀	
７０１（大宝元年）	造大安寺官と造薬師寺官を寮に準じさせる。造塔官と造丈六官を司に準じさせる。	続日本紀	文武朝大官大寺
７０２（大宝２年）	造大安寺司を任命する。	続日本紀	
この頃（文 武 朝）	文武、九重塔と金堂を建て、丈六の仏像をつくる。	大安寺縁起	
７１０（和銅３年）	平城宮（ならのみや）に移る。	続日本紀	
７１１（和銅４年）	大官大寺焼け落ちる。	扶桑略記	
７１６（霊亀２年）	大官大寺を平城京へ移建する。	続日本紀	大安寺
８８０（元慶４年）	百済大寺と「高市大官寺」の旧寺地である十市郡（とおちぐん）百済川のほとりの田と高市郡（たけちぐん）夜部村（やべむら）の田を、大安寺の願い出によって返還する。	日本三代実録	